【研究論文】

連体修飾表現の接続形式トノとその周辺

登内　恭平

1. 研究の目的

本研究は(1)のような連体修飾表現の接続形式「との」（以降，トノ）や(2)のようなトノの文末表現である「とのことだ」（以降，トノコトダ）の表現の特徴について再考することが目的である。ただし，本研究では(3)のように「～と一緒の」という意味で使われる「との」は扱わない。

(1)　彼はもうすぐ結婚するとの噂

(2)　あの会社は海外出張が多いとのことだ。

(3)　この写真は彼との大事な思い出だ。

さらに，同じく連体修飾表現の接続形式「という」（以降，トイウ）やその文末表現として用いられる「ということだ」（以降，トイウコトダ）についても触れる。そして，トノやトノコトダと比較しながら，連体修飾表現の接続形式とそれが文末に使われる表現との間では，人称の制限が対応しているということを示唆する。

2. 接続形式トノと伝聞用法の形式トノコトダについて

2. ではトノとトノコトダに関わる先行研究を取り上げ，トノ・トノコトダ両方の引用及び伝聞に関わる問題提起を行う。

2-1. 接続形式トノにおける先行研究

2-1.では接続形式トノの先行研究について益岡(1997)や王(2008a)を中心に取り上げ，トノが引用表現として捉えられていることを示す。

まず，益岡(1997)では，トノは「の」を接続形式とする基本型[i]が「引用」の関係を表す「と」と結びついた，(4)の形式の表現であると考えている。

(4)　修飾節＋引用の助詞「と」＋「の」＋名詞

また王(2008a)ではトノの意味機能について，「引用表現を連体節に取り込み，抽象的な概念が（主名詞）を具体的に説明するという働きをもつ」

ものとして規定している。つまり，王(2008a)でも基本的にトノは引用の概念と関わりが深い表現であるとしている。

このように，益岡(1997)や王(2008a)の接続形式トノの先行研究をみてみると，トノの性質が基本的に「引用表現[ii]」に関わるものであるといえる。

2-2. 伝聞のトノコトダに関わる先行研究

2-2.では(5)のような文末表現トノコトダに着目し，三つの先行研究を取り上げる。

(5) 彼は三年間オーストラリアで仕事をしていたとのことだ。

まず宮崎・安達・野田・高梨(2002)ではトノコトダが一種の伝聞形式として扱われている。下に挙げる(6)(7)は宮崎・安達・野田・高梨(2002)から引用したものである。

(6) 「上司の命令です。あなたと柳さんを，都内のホテルの一室に保護せよとのことです」(赤川次郎『女社長に乾杯！』p.546)

(6)は伝言の受け渡しや内容を要約して伝えるという特徴があるとしている。また，(7)のように「伝聞した情報内容だけではなく，過去においてそのような情報の受け渡しがあったということまで含ませて述べるときには，過去形が使用される」と述べている。

(7) 「今，お宅のお嬢さんから電話がありました。お宅さんへ伝言してくれとのことでした。思いきって隣村の九一色病院へ入院したが，容態は大して悪くないから安心してくれとのことでした」(井伏鱒二『黒い雨』p.509)

さらに「基本的には，情報源が特定されている場合でなければ，使用できない」として(8)のような例を挙げている[iii]。

(8) 彼の意見によると／*噂では，あの会社は官庁との癒着があるかもしれないとのことだ。

また，グループ・ジャマシイ編(1998)はトノコトダについて次のように述べ，(9)～(11)の例を挙げている。用例はグループ・ジャマシイ編(1998)からの引用である。ただし，用例の下線部は筆者による。

「…(だ)そうだ／ということだ」の意味で，人から伝え聞いたことを言う場合に用いる。(略)「だ」が省略されたまま文が終わることもあ

る。「とのことだった／でした」のようにタ形にはなるが，否定形にはならない。(グループ・ジャマシイ編 1998:354)

(9) みなさんによろしくとのことでした。

(10) 無事大学に合格なされたとのこと，まことにおめでとうございます。

(11) 社長は少し遅れるので，会議を始めておいてくれとのことでした。

最後に日本語記述文法研究会編(2009)ではトノコトダについて，通常の伝聞用法のほか，伝言のとりつぎにも用いられる表現であるとしている。

(12) 山田：(高橋に)「4時に行くからと，清水に伝えておいてくれ」
高橋：(清水に)「山田が4時に来るとのことだ」

また，(13)のように「だ」のない形で手紙などに用いられ，相手の近況について聞き及んでいることを述べる用法もあるとしている。

(13) このたびは，無事に元気な赤ちゃんを出産したとのこと。誠に喜ばしく感じております。

この「相手の近況について聞き及んでいることを述べる用法」はグループ・ジャマシイ編(1998)での説明(「だ」が省略されたまま文が終わることもある)に用いられている(10)の例と用法が一致している。

以上からトノコトダの先行研究の中で挙げられている特徴を次の五点にまとめることができる。

① 伝聞用法の形式である。
② 否定形にならない。
③ 「だ」のないとき，相手の近況について聞き及んでいることを述べる用法がある。
④ 伝言のとりつぎにも用いられる。
⑤ 過去形をとるとき，「過去のある時点でそのような情報を受け取った」ということを表している。

2-3. 問題点の提示と考察方法

2-2.まで通してトノ連体節が引用表現であるということ，そして，トノ

コトダが伝聞用法の形式であり，いくつかの特徴をもつ表現であるということを捉えることができた。

しかし，トノ連体節は引用表現であるのに対して，トノコトダを用いた表現は伝聞表現であり，同じ「トノ」に関わる表現であるのに，なぜ，引用と伝聞という異なる概念で説明されているのか，という問題点が浮かび上がる。

そこで本研究ではこの問題点を考察する上で以下の三つの課題を挙げ考察する。

Ⅰ．引用と伝聞の違いとは何か。

Ⅱ．トノ連体節の修飾表現は本当に引用の概念が関わるのか。

Ⅲ．トノコトダの特徴として先行研究で挙げられているものが伝聞用法の形式として説明できるか。

3．問題点の考察

3-1．引用と伝聞の違い

引用と伝聞の違いについては引用元の人称を手がかりに考察する。まず，(14)(15)(16)の例から引用表現の人称についてみてみる。

(14)　財布を拾ってもらい，私はありがとうといった。

(15)　僕は出来ると言ったのに，君は絶対に無理だといった。

(16)　一回目の相手を知って，彼は絶対に勝てるといった。

上の三例から引用表現は人称に関わらずに成り立つということがわかる。一方，伝聞表現は人称に制限があることが(17)(18)(19)からみえる。

(17)　*友人が結婚するそうだと思う。

(18)　*君によると，今夜は流れ星がみえるそうだ。

(19)　高橋によると，彼は優勝できるそうだ。

一人称の表現では，伝聞の典型的な表現とされる「そうだ」（以降，ソウダ）が使えない。また二人称の「君」を情報源と特定すると表現が成り立たない。つまり，伝聞表現においては(19)のように第三者の過去の発話や思考が情報源となっている必要があるといえそうである。

これらから，引用元の人称を手がかりに，引用は人称に関わらず表現でき，伝聞は第三者の過去の発話や思考に限られて引用され表現されるとい

う違いがあるとわかった。これは森山(1995)の伝聞の対話性[iv]とも対応する考え方である。こうした引用元の人称の違いを本研究における引用と伝聞の違いとする。

3-2. トノ連体節の引用について

3-2.ではⅡの課題について泉原(2007)や王(2008b)を中心に先行研究を挙げて，トノ連体節と「引用」の概念の関わりについて考察をまとめる。

まず，泉原(2007)ではトノ連体節の引用について，接続形式トイウとの違いの中で，トノは引用に制限があるということを指摘している。このことを示す例文を(20)(21)に挙げる。

(20) 先輩の結婚式のため，同窓会には出席はできないとの返事があった。

(21) *今月にもプロジェクトを立ち上げるとの連絡をした。

また，王(2008b)はトノ連体節の引用が第三者の発話や思考に限られるという性質が接続形式トイウとの違いの中で非常に重要なことであると以下のように考察している。

王(2008b)はトイウとトノは他人の発言や考えを引用して表す連体節に介在できるとした。(20')はその例である。しかし，それ以外の場合，トノの介在は制限されるとした。

(20') 先輩の結婚式のため，同窓会には出席できない{という・との}返事があった。

(21) 子どもたちには，先生に言われたことだけやればよい{という・?との}意識があった。

例えば，(21)は連体節の部分だけ見れば，子どもの発言の引用とも考えられるが，実際に「先生に言われたことだけやればよい」と明言した子どもについての表現とは考えにくい。連体節の内容は話し手が子どもたちの行動や発言から子どもたちの「意識」に対する推測や評価を表すものであるとわかる。このように「話し手自身の言葉で他人の考えを表す連体節では，「トノ」は許容されにくい(王 2008a:64)」とされる[v]。

また，王(2008b)は話し手自身の言葉で表す場合，(22)のようにトノではなく，トイウが用いられるのが普通であるとしている。

(22) 私はあなたに対して「謝罪をするならば許してもいい」という

思いはある。

(23) 私には死んだ友人の分まで生きていかなければ，との思いがあった。

しかし，(23)では「思い」の具体的な内容を示す連体節は話し手自身の過去の発言を再現する形で表現されている。王(2008b)はこのような場合，特殊な場合としてトノが介在することがあると指摘している。

このように，王(2008b)ではトイウとの違いからトノの性質を考察している。しかし，上記のようなトノの現象は王(2008a)で規定されているトノの意味機能（「引用表現を連体節に取り込み，抽象的な概念(主名詞)を具体的に説明するという働きを持つ」もの）から説明することが難しい。泉原(2007)や王(2008b)の先行研究を踏まえても，話し手自身の言葉で語れない性質もまた意味機能として重要な一部を担っていると考える。よって，本研究ではトノの意味機能を次のように規定する。

基本的にトノは第三者の発話や思考を連体節に取り込み，抽象的な概念（主名詞）を具体的に説明している。

このように規定することで，先行研究で指摘されている現象をうまく説明することができる。つまり，トノ連体節は第三者の発話や思考の引用に制限されるという性質上，話し手の推測や評価が入るような表現はトノの介在が許容されにくい。ただし，話し手の過去の発言や考えを再び取り上げる場合は，話し手と聞き手の間で〈過去の話し手〉を第三者とし，過去の情報を第三者の情報として受け止めれば，トノ連体節で表現することも可能と言えそうだ。これは，連体節の内容と元の発言との引用関係を明示するというトノの性質に支えられているとも考えられる[vi]。

こうしてトノの連体修飾表現を引用という観点からみてみると，トノ連体節は第三者の発話や思考に制限されているといえる。そして，その性質によって話し手と聞き手の間に第三者の発話や思考を引用した情報が媒介するという構造ができ，伝聞表現と同じ対話性を築いていると考える。このことから，一般的には伝聞は文末表現を指すが，トノ連体節は引用表現の形式と捉えるよりは，伝聞表現と共通した働きをしている表現形式といった方が自然である。

3-3. トノコトダの特徴について

先行研究では，トノコトダを伝聞用法の形式として扱っているが，3-3.では2-2.でまとめた②から⑤までの特徴が①の伝聞用法の表現形式の特徴として説明できるのか，典型的な伝聞用法の形式ソウダなどと比較しながら考察する。

まず，②であるが，否定形にならないという特徴は同じ伝聞形式とされるソウダやトイウにも見られる現象である。

(24) *明日は雨が降るそうではない。

(25) *明日は雨が降るといわない。

これをソウダやトイウを使って言おうとすると，

(24') 明日は雨が降らないそうだ。

(25') 明日は雨が降らないという。

のように，事態の否定[vii]によってしか表すことができない。よって伝聞表現の特徴として捉えることができる。

次に③である。「だ」のない表現は(26)のように手紙の中で使われるのが通例であるが，〈とのこと〉の内容は基本的に伝える相手に関わる情報である。つまり，第三者から聞いた情報を，それに関わる相手に伝えるという用法になっている。このときは断定のダをつけて，(26')のように表現すると不自然な文となる。〈とのこと〉を引用の助詞「と」に関わる表現として，相手に関わる情報の内容を単に引用していると捉える方が自然である。

(26) お二人が結婚したとのこと。おめでとうございます。

(26') *お二人が結婚したとのことだ。おめでとうございます。

次に④であるが，伝言のとりつぎはソウダよりも宮崎・安達・野田・高梨(2002)で「多分に引用構文の性質を残している」とする「って」の方で言い換えた方が自然である。

(12') 山田：(高橋に)「4時に行くからと，清水に伝えておいてくれ」
高橋：(清水に)「山田が4時に来るとのことだ／??そうだ」

(12") 山田：(高橋に)「4時に行くからと，清水に伝えておいてくれ」
高橋：(清水に)「山田が4時に来るとのことだ／って」

つまり，伝言のとりつぎという用法はトノコトダを引用の助詞「と」に関わる表現として捉えた時に説明できそうだ。よって④については伝聞用法の表現として十分に説明することはできないとなる。ただし，伝言のとり

つぎは第三者の過去の発話を引用して表現しているという点で伝聞表現と働きが共通している。つまり，引用表現と伝聞表現の間にあるような働きをしていると考える。

最後は⑤についてである。森山(1995)では，「伝聞の機能が発話現場で情報を「利用する」ことだと考えれば，その利用上の標識としての伝聞形式は発話時点に限って使われる」としているため，過去の表現が伝聞表現の特徴として扱われていない。(27)のように伝聞の典型的な表現ソウダでは過去の表現ができない。

(27) *山田の話では，彼は4時に来るそうだった。

一方，引用の表現では過去の表現ができる。

(28) 僕はプレゼントをもらって「ありがとう」といった。

このように考えると，この過去の表現ができるという特徴は伝聞表現にはなく，引用表現の特徴として捉えるのが自然だろう。

このように②から⑤までの特徴をみてきたが，伝言のとりつぎという④の特徴や過去の表現が可能であるという⑤の特徴からトノコトダは①のように伝聞用法の形式であると断言できない。つまり，トノコトダは引用表現の特徴も兼ねているために，伝聞表現として完成された表現とは言えない。よって，トノコトダは引用から伝聞へと働きが変化している途中経過にある形式と考える。またこうした考察から，引用と伝聞の領域は完全に区別できるものでなく，連続しているものであるということも言えそうである。さらに，トノ連体節やトノコトダが基本的に第三者の発話や思考の引用に制限されるという性質で共通している。

4. トイウとトイウコトダとの比較

4. では連体修飾表現の接続形式トイウと文末表現として用いられるトイウコトダについて触れる。そして，3. までの考察とトイウやトイウコトダとの比較を通して，連体修飾表現における人称の制限が文末表現の人称の制限と対応しているということを示す。

4-1. トイウやトノコトダの先行研究

まず，トイウについて中畠(1990)では四つの用法，「引用」「名づけ」「伝聞」「つなぎ」を挙げて論じている。

この四分類を「人称の制限」という観点で捉えると，引用が次の(29)(30)(31)のように「いう」主体を人称に関わらず特定しているということがいえる。このことは本研究の引用の特徴である人称に関わらないことと一致する。

(29)　感謝するとき，私は「ありがとう」という。

(30)　あなたはよく「無理はするな」という。

(31)　高橋はたいてい驚くときに「本当に？」という。

また，名づけや伝聞においては特定できない主体を想定する表現が用法として挙げられている。ただし，それは必ずしも主体が特定される表現が不可能であるということではない。この二用法[viii]を人称という観点からより正確に捉えると，名づけの表現は人称に関係なく成立するといえる。一方，(35)(36)のように中畠(1990)による伝聞の例では，一人称や二人称のように「いう」主体が特定される場合，表現としては不自然であり，第三者の発話や思考を引用し表現するという本研究における伝聞の働きと同じであるといえる。

(32)　このあたりを善光寺平というと思う。

(33)　君はこのあたりを善光寺平というんだね。

(34)　祖父母はこのあたりを善光寺平というそうだ。

(35) *私／*君によると，長野は松茸生産量が日本一だという。

(36)　名人によると，長野は松茸生産量が日本一だという。

このように人称制限という観点からトイウを捉えた場合，表１のようになる[ix]。

表１　トイウの人称の制限

	引用	名づけ	伝聞	つなぎ
一人称	○	○	×	—
二人称	○	○	×	—
三人称	○	○	○	—

トイウの中には人称の制限がある表現もあり，それは本研究における伝聞の働きと一致しているといえる。このことを連体修飾表現の接続形式トイウとして捉えると，トイウを用いた表現は基本的に人称制限がない引用表現であり，特定の用法の中でのみ制限があるということである。

次にトイウコトダについてである。益岡・田窪(1992)や泉原(2007)ではトイウコトダを伝聞表現の形式として扱っている。しかし，トイウコトダはトノコトダ同様，過去の表現があり，伝聞表現として完成されているとはいえない。

また，(37)(38)(39)のように人称に関わらない表現という点からも伝聞表現の形式であると断言はできない。むしろ，人称に関わらないという引用表現の特徴と同じであるといえる。

(37) 私は分数や小数の足し算や引き算が苦手である。つまり，算数はあまり得意ではないということだ。

(38) A：「もうあなたとは話すことはないね。」
B：「それはもう帰れということですか。」

(39) 奥さんによると，ご主人はその夜帰らなかったということですが，本当ですか。

さらに，連体修飾表現の接続形式トイウの人称に関わらないということとトイウコトダの人称に制限がないということが対応しているといえる。

4-2. 問題点の考察との比較

問題点の考察の中で連体修飾表現の接続形式トノとトノコトダは人称という観点からみると，どちらも第三者の発話や思考を引用する伝聞表現の特徴をもち，三人称の表現という人称の制限にも対応している。

また 4-2.では，トイウとトイウコトダの人称制限がないという点でそれぞれ対応しているということを指摘した。このように，連体修飾表現の接続形式とその文末表現においては人称の制限がそれぞれ対応しているということがいえそうである。

5. 本研究のまとめと今後の課題

5-1. 本研究のまとめ

連体修飾表現の接続形式トノについては先行研究の中で引用表現として扱われていたが，第三者の発話や思考に限られた引用をするという性質があり，トノが伝聞表現と共通した働きをしていることがわかった。一方，トノコトダは過去の表現が可能であったり，伝聞表現の特徴からだけでは

説明の難しい伝言のとりつぎという働きもあったりするために，先行研究で扱われているような伝聞用法の形式であるとは断言できない。そこで本研究では引用表現と伝聞表現の特徴を兼ねているために，トノコトダを引用から伝聞へと働きが変化している途中経過にある形式であるとした。

また，4．トイウとトイウコトダという表現形式にも触れた。そして，トイウとトイウコトダが，人称に制限がないという性質でそれぞれ対応していることを示した。また，トノやトノコトダの人称制限の対応とも比較し，表２のようにトノやトイウという連体修飾表現の接続形式における人称の制限がそれぞれの文末表現においても対応していることを示唆した。

表２　連体修飾表現の接続形式とその文末表現における人称の制限

	人称の制限有	人称の制限無
接続形式	トノ	トイウ
文末表現	トノコトダ	トイウコトダ

トノやトノコトダなどの表現は今までは引用表現と伝聞表現といった大きな枠組みで論じられることが多かった。しかし，これからは言語事実と照らしたより正確で精密な議論が必要であるといえる。

5-2．今後の課題

課題としては，本研究におけるトノの意味機能の規定から名詞同士を繋ぐトノの使用については説明されていないという点を挙げる。(40)の用例なども数は多くないものの，一定数はある。よってこうした使用用法についてなぜこうした使用が可能であるかは残された課題である。

(40)　当初は「軽症」との情報もあったが，病室を出入りする医者の険しい顔を見て，会社に「様子が変です」と電話した。(毎日ｊｐ－毎日新聞のニュース・情報サイトより)(2011.7.14)

さらに，他の連体修飾表現の接続形式「ような」なども含めた連体修飾表現の中で本研究がどう位置付けられるかについても今後の課題だろう。

【注】

i 「の」を接続形式とする基本型とは，「彼の本」や「車の話」といった連体修飾表現を指している。

ii 「引用が関係する表現」や「引用の概念に関わる表現」などの表現を統一し，本研究では以降「引用表現」とする。

iii しかし，(5)のような表現の場合，情報源が特定されているとは言えず，連体節の内容が〈彼〉から聞いたものなのか，〈彼〉以外から聞いたものなのか判別できない。(8)のように「～によると」などの表現が伴うことで，トノ連体節の内容の情報源が特定される場合もあるが，必ずしも情報源が特定されるとは限らないと考える。

iv 森山(1995)は「第三者からの情報を聞き手に取り次ぐ」といった伝聞の意味特性を「伝聞の対話性」と呼んでいる。本研究も同論文に従って用いることにする。

v 筆者は話し手自身の言葉で表せないという表現は的確ではないと考える。(20)のように話し手が聞いた内容を要約して伝える場合は話し手の言葉で表しているものと考えるためである。本研究では話し手の推測や評価を表す場合に限ってトノの介在は許容されにくいと解する。

vi 王(2008a)では，トノ連体節の表現には，報道文に扱われている文を中心に，あえてトノを用いることで連体節の内容と元の発言との引用関係を明示することができるという性質を指摘している。話し手の過去の発言や考えを引用するトノの特殊な例もこうした性質から考えられるのではないか。本研究では指摘するだけに留めて，考察については今後の課題とする。

vii 文を命題とモダリティに分けたときに命題の事態を否定する表現を〈事態の否定〉とし，モダリティの中の判断を否定する表現を〈判断の否定〉としている。

viii 名づけと伝聞の区別をつけるために伝聞のソウダを後続して表現が成立するか否かを基準とした場合，「このあたりを善光寺平という」のような名づけの用法の場合，「このあたりを善光寺平というそうだ」とソウダを後続しても表現が成立する。しかし，伝聞用法の場合，「昨日の長野は大雪だったという」にソウダを後続させた表現「昨日の長野は大雪だったというそうだ」は不自然であるといえる。

ix 中畠(1990)同様につなぎの用法では「いう」主体そのものが問題にされないため，「いう」主体の人称に関わる表１においても同様に―を付した。

【参考文献】

泉原省二(2007)『日本語類義表現使い分け辞典』．研究社．

王 彩麗(2008a)「連体節の接続形式「トノ」の意味機能―非引用名詞が主名詞となる場合を中心に」『神戸市外国語大学研究科論集』p.1-18.

王 彩麗(2008b)「連体節接続形式「トイウ」と「トノ」の違い―引用名詞が主名詞となる場合を中心に」『神戸外大論叢』p.53-70.

グループ・ジャマシイ編(1998)『教師と学習者のための日本語文型辞典』p353-354. くろしお出版．

中畠孝幸(1990) 「「という」の機能について」『阪大日本語研究』.大阪大学文学部日本語学科.

日本語記述文法研究会編(2009) 『現代日本語文法４』p.177-178. くろしお出版.

益岡隆志(1997) 『複文』(新日本語文法選書 2) . くろしお出版.

益岡隆志 田窪行則(1992) 『基礎日本語文法-改訂版-』. くろしお出版.

宮崎和人 安達太郎 野田春美 高梨信乃(2002) 『新日本語文法選書 4 モダリティ』 p152-164. くろしお出版

森山卓郎(1995) 「「伝聞」考」.『京都教育大学国文学誌』p25-36. 京都教育大学国文学会.

（とのうち　きょうへい　松本市立梓川小学校）